

42395

教科書文庫

4
815
42-1938
20000 26622

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

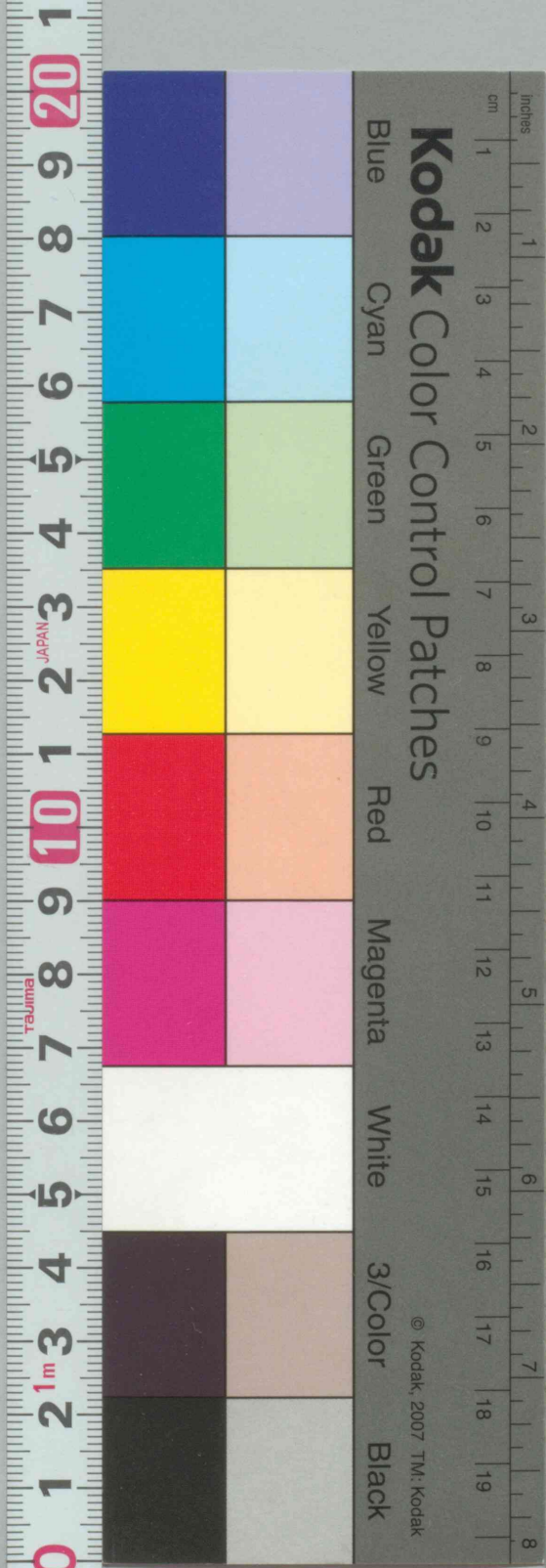


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Yal3
資料室

子女
日本文法教科書

上級用



教科
42
200



日五十二月三年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高

教科書文庫
4
815
42-1938
2000026622

資料室

375.9
Y213

文學博士 山田孝雄著

上級用

子女
日本文法教科書

株式會社
寶文館藏版

広島大学図書

2000026622





例言

一、本書は高等女學校上級用の文法教科書として編纂したものである。

一、本書は昭和十二年三月改正の教授要目に準據し、主として文法の文法を説いたものであるが、著者の編した初級用の教科書と連絡を有するものであつて、初級で教へた事項を複習しつゝ、新たな事項を加へ以て、日本文法の全體に亘つて基礎的知識を與へることをつとめた。

一、分解にはじまつて總合に進み、又敬語を説くことは初級用と同じ步調であるが、本書はその總合と敬語とについては更に一步を進めたものである。

一、本書は平易簡明を旨として、つとめて注入教授、器械的記憶の

弊を避け開發的歸納的に叙述しておいた。
一、練習問題は生徒に正確な知識を收得させるために、精選した
つもりである。

昭和十二年九月

山田孝雄

子女
日本文法教科書 上級用 目次

第一章	總說	一
第二章	體言	三
第三章	用言	七
第四章	形容詞	一一
第五章	動詞	一九
第六章	助動詞	四六
第七章	副詞、接續詞、感動詞	七〇
第八章	助詞	七五
第九章	詞の轉成	八五
第十章	接辭	八九
第十一章	詞の合成	九五

第十二章	文の成分	……	一〇七
第十三章	文の構成	……	一一九
第十四章	文の性質上の分類	……	一二四
第十五章	文の構造上の分類	……	一二九
第十六章	敬語	……	一三三

子女
日本文法教科書
 上級用



第一章 總 說

【一】言語、文字、文章といふものの説明や、國語、國文といふものの意義は既に述べたところである。

【二】わが國では文語と口語との間に多少の差異が見える。この差異がたゞ用ゐる語の差異に止まらず、文法の上にもあらはれる點がある。前學年では口語の法則を主として教へたが、これから説く所は文語の法則を主としたものである。

【三】文法は自分の考へを正しく發表する爲にも他人の言語、文章を正しく會得する爲にも學ばねばならぬものであるが、その言語、文章の正

しいかどうかといふことは國語の歴史によつて判断するものであるといふことは既に教へたところである。

【四】 文法では文を組立てる材料になるもの即ち詞を第一に研究し、次にその詞を用ゐて發表する文の研究に移るのが順序であるからして、本書もその順序によつて説明する。

【五】 文語と口語とは文法の上から見て差異があることも少くないが、詞の種類によつてその差異の殆ど無いものもあるし、又可なりに著しい差異のあるものもある。詞はその性質や作用によつて次の四類八種に分けることも既に述べた所である。

- (一) 體言……………名詞 代名詞
- (二) 用言……………形容詞 動詞
- (三) 副用語……………副詞 接續詞 感動詞
- (四) 關係語……………助詞

練習 一

次の文の中の體言と用言と副用語と關係語とを區別して示せ。

- (1) 庭の櫻が美しく咲いた。(口語)
- (2) 源氏物語は紫式部のつくつたものである。(口語)
- (3) 勉強は幸福の母にして怠惰は立身の敵なり。
- (4) 夕日も山のかなたに沈めば、やがて森のこなたに燈火の光も見えそめぬ。

第二章 體言

【六】 詞のうちで事物をあらはす詞が體言であつて、それには名詞、代名詞の二種類が屬することは既に述べたところである。

【七】 すべて事物の名前として用ゐる體言が名詞と名づけられるものであるが、この名詞には口語と文語との上に文法上の取扱方に差異は

無いものである。

【八】名詞の敬語 名詞には最初から敬語として成り立つたものが少くない。その例

(一) 敬稱

天皇 皇后 皇太后 皇太子 親王 王

陛下 殿下 宮 閣下

叡慮 行幸 天顔 おぼしめし

尊父 令兄 貴家 芳墨 高名 光來 等

(二) 謙稱

不肖 臣 小生 拙者

愚弟 弊屋 粗品 等

【九】名詞に屬してゐるといはれるもので特に數詞と名づけるものがあることも既に述べたところである。この數詞は文法の上から見れ

ば口語でも文語でも別に取扱方に差異は無いものである。

【一〇】すべて事物をさしてその名前をいふ代りに用ゐる體言が代名詞と名づけられるものであることも既に述べたところである。代名詞は文語と口語と習慣上用ゐる語のちがひもあるが、文法上の取扱方は差異のないものである。

【一一】代名詞は自稱と對稱と他稱との三に分れるものであるが、他稱はなほこまかく分けることが出来る。これをまとめると次の表のやうになる。

わ	自稱 (第一人稱)		對稱 (第二人稱)		他稱		物事
	な	なれ	な	なむち	近	中	
	こ	これ	そ	それ	不定	不定	人
	あ、あれ	か、かれ	た、たれ(だれ)	いづれ(ど)	なに(どれ)		

われ

(わたくし) (あなた)

		こ		かしこ		場所
		こ		あしこ	いづく、いづこ(ど)	
(おまへ)		こち	そち	(あすこ)	いづら	向方
(こちら)	こなた	そなた	あなた	あなた	いづち(どつち)	
(そちら)	あなた	あなた	あなた	あなた	(どちら)	
(あちら)	あなた	あなた	あなた	あなた	いづかた(どなた)	

注意

(一) 以上の外におのれといふ語がある。これは實體そのものをさし、自稱、對稱、他稱何れにも用ゐられる。

(二) 「これ」「ここ」「それ」「そこ」「あれ」は文語にも口語にも用ゐられる。

(三) 括弧()をしたものは口語だけに用ゐられるものである。

【二】代名詞の敬語 代名詞には本来の敬語は少い。「あなた」「どなた」の他稱から對稱に轉用したものが敬語と認めるべきものである。

練習 二

次の文の中の名詞、數詞、代名詞を抜き出せ。

- (1) それは私も望むところでございます。(口語)
- (2) 山のあなたのふるさとよ。あの空戀し母戀し。
- (3) 奈良七重七堂伽藍八重櫻。
- (4) 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆるかざりは櫻なりけり。
- (5) 何處からともなく氣輕な黄色い蝶が飛んで來ました。さうして
菜の花の上をひらくととびまはつてゐました。(口語)
- (6) 華麗優美雄大の三つを兼ね備へた風景は實に富士山である。(口語)
- (7) この説を聞くもの誰か彼の博識を賞せざる。

第三章 用言

【三】用言には活用があること、又その活用する部分を語尾といひ、活用

しない部分を語幹といふこと、及び、短い詞は語幹がそのまま活用することもあるといふことは既に述べたところである。

【四】用言の活用の型を活用形といふことは既に述べたところであるが、文語の用言に於てはその活用形は口語の用言の場合と少しくちがふ。文語の用言の活用形は通例次の六通りあると考へられる。

死

な	(未然)……………死なむとす。
に	(連用)……………死に果てたり。
ぬ	(終止)……………王事に死ぬ。
ぬる	(連體)……………死ぬる人。
ぬれ	(已然)……………死ぬれば萬事休す。
ね	(命令)……………潔く王事に死ね。

この六通りの活用形をそれぞれ未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形と名づける。

【五】未然形は、例へば「花美しくば買はむ」「雨降らず」などのやうにまだその事の成立つてゐない場合をあらはすに用ゐる活用形である。文語の未然形は大體口語の未然形と同じものであるが、その下に「ば」「む」「ず」などがつくのである。

【六】連用形は、例へば「花美しく咲く」「雨降りつづく」などの「美しく」「降り」のやうに下の用言につらなる活用形である。これは文語も口語も大體同じものである。

【七】終止形は例へば「花美し」「雨降る」などのやうに文句をいひ終る場合に用ゐる基本の活用形であるが、この活用形は口語の場合と著しくちがふものである。

【八】連體形はその用言が體言につらなる時に用ゐる活用形で、例へば「美しき花」「降る雨」などの「美しき」「降る」がそれである。

【九】口語の用言では終止形と連體形と同じ形を用ゐるのであるから

區別を立てなくてもよいが、文語の用言ではたとへば「王事に死ぬ」終止形「王事に死ぬる人」連體形「ここに人あり」終止形「ここに在る人」連體形のやうに終止形と連體形とちがふ活用の形をなすものが少くないから、この二の活用形を立ててその區別を明かにする必要がある。

【二〇】已然形とはすでに成り立つてゐる事を條件とする場合をあらはす活用形で、「花美しければ愛せらる」「雨降れば地固る」などの「美しけれ」「降れ」がそれである。この活用形には下に「ば」「ど」「ども」がつく。この活用形は口語の用言では汎く條件を示すものだけれども、文語の用言では已に然ある事を條件とするだけだから已然形といふのである。

【二一】命令形とは、命令、許容などの意味を表はして終止する用言の活用形で、「行け」「起きよ」などがそれである。

練習 三

一次の用言の語尾の變化を考へて見よ。

善し	高し	書く	押す	待つ
思ふ	釣る	起く	賞む	富む

二次の用言の活用形についてその名稱をいへ。

- (1) 花美し。
- (2) 美しき花あり。
- (3) 戦へば必ず勝つ。終
- (4) 本を讀め。
- (5) 早く起きよ。命令形
- (6) 雨降らば花を散さむ。

第四章 形容詞

【二三】形容詞の活用は文語と口語とで違ひがある。口語では「く、い、けれ」の形一種であるが、文語では大體「く、し、き、けれ」の形に活用するものであ

つて、しかも二種類になる。その一つは「赤し」といふやうな形容詞で、

赤	
く	(か行) 花は赤く實は青し。
し	(さ行) この花は赤し。
き	(か行) 赤き花あり。
けれ	(か行) 色赤ければ甚だ美し。

と活用する。これをく、し、き活用といふ。他の一は「美し」といふやうな語幹が「し」で終る形容詞で、

美し	
(し)く	(か行) この花は美しく咲く。
(し)き	(か行) この花は美し。
(し)けれ	(か行) 美しき花は咲く。
(し)けれ	(か行) 花美しければ見る人多し。

と活用する。これをし、き活用といふ。これを一括してみると次の通りである。

「く、し、き」活用

赤く	赤し	赤き	赤けれ
----	----	----	-----

「し、く、し、き」活用

美しく	美し	美しき	美しけれ
-----	----	-----	------

「く、い、けれ」活用

赤く	赤い	赤けれ
美しく	美しい	美しけれ

右の如く形容詞の活用は、文語ではカ行とサ行の二行にわたり、口語ではア行とカ行との二行にわたつて活用する。

【三】すべて形容詞には命令形が無いものであるが、文語の形容詞では、その活用形は必ず五通りである。

(一) く、し、き活用

く (未然) 山高くば眺望よからむ。

く (連用) 山高く聳ゆ。
 高し (終止) 山高し。
 き (連體) 高き山に攀ち登る。
 けれ(已然) 山高ければ眺望甚だよし。

(二) しく、しき活用

しく (未然) 風涼しくば凌ぎよからむ。
 しく (連用) 風も涼しく吹く。
 涼し (終止) 風も亦涼し。
 しき (連體) 涼しき風吹く。
 しけれ(已然) 風も涼しければ凌ぎよし。

用言の活用形の意味や用法については既に述べたが、文語の形容詞の活用で特に注意せねばならぬ事を次に述べる。

【二四】やさしくば。間違ふ事もあるまじ。

美しくとも。手にとるなかれ。

上の例のやうに未然形に「ば」のつくことは他の用言と同じことであるが、「ず」や「む」のつかないことと「とも」がつくこととはちがつてゐる。

【二五】任重くして道遠し。

優しく且つ美し。

上の例のやうに形容詞の終止形は「し」といふ語尾をとつて、文句を言ひをはる場合に用ゐられる。

【二六】めづらしき人と相かたりぬ。

なつかしき彼は來たりぬ。

上の例のやうに形容詞の連體形は「き」といふ語尾をとつて、その下に名詞又は代名詞がつく。

【二七】山高ければ登るに難し。

速力早けれども危険多し。

悲しけれど泣かず。

右の文のやうに形容詞の已然形は「けれ」といふ語尾をとつて、その下に「ば」「ども」「ど」などがつく。この活用形は已にあらはれた事を條件としていふに用ゐるものであることは既に述べたところである。

【三八】形容詞の活用表 文語と口語とをまとめて次に示す。

種 類	例	未然	連用	終止	連體	已然
く、し、き活用	白	く	く	し	き	けれ
しくしき活用	樂	しく	しく	し	しき	しけれ
く、い、けれ活用	甘	く	く	い	い	けれ

注意(一)活用が同じくても活用形のちがふものに注意せよ。

(二)しくしき活用は終止形に「し」を重ねない點の外はくしき活用と似てゐる。

(三)くしき活用、しくしき活用では、未然形と連用形とが同じである。

(四)く、い、けれ活用では未然形と連用形、終止形と連體形とが同じである。

【二九】「如し」といふ詞は特別な形容詞であつて事物をたとへて説明する場合に用ゐるものであるが、その活用形には已然形がない。これは文語に盛んに用ゐるが、口語には用ゐない。

【三〇】形容詞の語尾が音便となることは文語にもある。それは「善きかな」を「善いかな」とし、「正しくして」を「正しうして」といふやうなのである。文語の形容詞の音便には「い」となるものと「う」となるものとの二つがあり。これらをそれ／＼「い」の音便、「う」の音便といふ。

【三一】形容詞の敬語 形容詞では敬語として

あちらは大層お涼しいさうでございます。(敬稱)(口語)

實におはづかしう御座います。(謙稱)(口語)

のやうにいふこともあるが、それは「お」といふ語を上に加へた爲に生じ

たものであつて、形容詞自身が本来有する敬語ではない。

練習 四

形容詞

一次の文の中から形容詞を抜き出して、その活用形を説明せよ。

- (1) そほ降る雨の音細く、野末をわたる風遠し。
- (2) 正しい行まことをするまことは人の當然なさねばならぬ事です。(口語)
- (3) その色うるはしく、その香も亦ゆかし。終止形
- (4) 彼は深く肝に銘じてきつと御志を達しますと勇ましく答へた。(口語)
- (5) 三度たく飯さへこはし、やはらかし、思ふまゝにはならぬ世の中。
- (6) 山上模糊として白きは雲か、地上繽紛として翻るは雪か。
- (7) 人の親の子を思ふめぐみ、高きも賤しきも異なることなき、いとありがたきものとは思ひぬ。

二次の形容詞の活用形を示せ。

- 怪しあやまし 樂したのし 如しごとし 悪しわるし 遠しとほし
- 廣しひろし 青しあおし 貴したかし うれしうれし はなばなしはな

第五章 動詞

【三】動詞の活用はすべて五十音圖の一行に限つてあるものであることは既に述べたが、文語の活用は口語と違ひがある。口語の動詞では四段活用、カ行三段活用、サ行三段活用、上一段活用、下一段活用の五種類であるが、文語の動詞では以上の外にナ行變格活用、ラ行變格活用、上二段活用、下二段活用の四種類があるから、すべて九種類である。

【三】文語の用言の活用形は六通りであることは既に述べたが、文語の動詞の活用形はどの活用の種類に屬する動詞にも必ずその六通りがある。次に動詞の活用の各種類について、その活用形を示さう。

【四】四段活用はア、イ、ウ、エの四段に活用するものであるが、その活用形

の例は次のやうである。

降

れ	れ	る	る	り	ら
(命令)	(已然)	(連體)	(終止)	(連用)	(未然)
雨よ降れ。	雨降れば地固まる。	雨降る日。	雨降る。	雨降りしきる。	雨降らむとす。

これらの詞はその数が動詞の中でも最も多いものであるが、これを行に分けて示すと次のやうである。

カ		行
行	例 活用形	段
か	未然	ア
き	連用	イ
く	終止	ウ
く	連體	
け	已然	エ
け	命令	

ラ	マ	ハ	タ	サ
取	讀	言	待	押
ら	ま	は	た	さ
り	み	ひ	ち	し
る	む	ふ	つ	す
る	む	ふ	つ	す
れ	め	へ	て	せ
れ	め	へ	て	せ

口語の四段活用は大體文語でも四段活用である。文語の四段活用は右の六行に限つて活用するものである。随つて口語でナ行四段に活用する「死ぬ」といふ語は文語では四段活用には活用しないのである。

【三五】「死ぬ」といふ語は文語では次のやうに活用する。

死	に	な
ぬ	に	な
(終止)	(連用)	(未然)
王事に死ぬ。	死に果てたり。	死なむとす。

ぬる(連體) 死ぬる人。
 ぬれ(已然) 死ぬれば、萬事休す。
 ね (命令) 潔く王事に死ぬ。

上のやうに「死ぬ」といふ語はア、イ、ウ、エの四段に活用することは四段活用に似てゐるが、ウ段にル、レがそはる所が普通の四段とはちがひ、上下の一段に似てゐる。この活用をナ行變格活用といふ。これは四段活用を本格として、それに對するナ行の變格活用の意である。

ナ		行
死	例 活用形	段
な	未然	ア
に	連用	イ
ぬ	終止	ウ
ぬる	連體	
ぬれ	已然	エ
ね	命令	

この活用の語は「死ぬ」「往ぬ」の二語だけである。

【三六】「有り」といふ語は口語では普通のラ行四段に活用するが、文語では

次のやうに活用する。

有	
ら	(未然) 功あらば、賞せられん。
り	(連用) 功ありて賞せらる。
り	(終止) 旅順の役に功あり。
る	(連體) 功あるものは賞せらる。
れ	(已然) 功あれども賞を受けず。
れ	(命令) 人に愧ぢざる功あれ。

このやうに文語では「あり」といふ形で終止する。即ち、この語はア、イ、ウ、エの四段に活用するが、終止形は四段活用がすべてウ段であるに對して、この語はイ段になつてゐる點が變つてゐる。よつてこの活用をばラ行變格活用といふ。

行	段
ア	
イ	
ウ	
エ	

ラ	活用形
有	例
ら	未然
り	連用
り	終止
る	連體
れ	已然
れ	命令

この活用の語は文語の「あり」「居り」「侍り」の三語だけである。
 【三七】カ行三段活用はイ、ウ、オの三段に活用し、ウ段の下にル、レのそはつて活用するもので、これには「くる」の一語が屬するものであるが、以上の點は口語も文語もかはりが無いけれども、文語では終止形と連體形とが別であるから、次のやうに用ゐられる。

こ (未然) 春はやがてこむ。
 き (連用) 春はきぬ。
 く (終止) 春く。
 くる (連體) くる春を待つ。
 くれ (已然) 春はくれども鳥は來なかず。

(こ) (命令) 春よこよ。

カ	活用形	行
(來)	例	段
こ	未然	オ
き	連用	イ
く	終止	ウ
くる	連體	オ
くれ	已然	
こ(よ)	命令	

【三八】サ行三段活用はイ、ウ、エの三段に活用し、ウ段の下にル、レのそはつて活用することをいふので、これには「する」の一語が屬するものであるが、以上の點は口語も文語もかはりが無いけれども、文語では終止形と連體形とが別であるから、次のやうに用ゐられる。

せ (未然) よき行をせむ。
 し (連用) よき行をしたり。
 す (終止) よき行をす。
 (爲) する (連體) よき行をする人。

すれ(已然) 行きをすれば快し。
せ(命令) 行きをせよ。

この活用の動詞は「す」一語だけであるが「議す」「呈す」「詠ず」「信仰す」「講ず」「論ず」等のやうに漢語等を伴つて用ゐられることが多い。その時には往々濁音として活用する。

		行	
		例	活用形
サ	(爲)	未然	エ
生	ぜ	連用	イ
ぜ	し	終止	ウ
じ	す	連體	エ
ず	する	已然	
ずる	すれ	命令	
ずれ	せ(よ)		
ぜ(よ)			

【三九】上二段活用はイ、ウの二段に活用し、ウ段の下にル、レが添はつて活用することはいふ。この活用は文語にだけあつて、口語に無いところであるが、その活用形は次のやうに用ゐられる。

起

き	き	く	くる	くれ	き
(未然)	(連用)	(終止)	(連體)	(已然)	(命令)
未だ起きず。	早く起きたり。	早く起く。	早く起くる人。	早く起くれれば快し。	早く起きよ。

これらの語はその数が少くない。随つて、活用する行も次の通りである。

		行	
		例	活用形
カ	起	未然	イ
朽	ち	連用	ウ
ち	き	終止	エ
ち	き	連體	
つ	く	已然	
つる	くる	命令	
つれ	くれ		
ち(よ)	き(よ)		

ハ	鑄	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	び(よ)
マ	試	み	み	む	むる	むれ	み(よ)
ヤ	老	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	い(よ)
ラ	懲	り	り	る	るる	るれ	り(よ)

このうちヤ行に属するものは「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語だけである。文語の上二段活用の語は口語では上一段活用としてゐる。

【四】下二段活用はエ、ウの二段に活用し、ウ段の下にル、レが添はつて活用することをいふ。この活用は文語にだけあつて、口語に無いところであるが、その活用形は次のやうに用ゐられる。

け (未然) 恩を受けず。
 け (連用) 恩を受けたり。
 受く (終止) 恩を受く。

くる(連體) 恩を受くるを忝く思ふ。
 くれ(已然) 恩を受くれど、未だ之に報いず。
 け (命令) 寸志を受けよ。

これらの語はその数が頗る多い。随つてその活用する行も多くて五十音圖の十行すべてにわたつてゐる。

行	段	エ	ウ	エ
例	活用形	未然	連體	已然
ア	(得)	え	うる	うれ
カ	受	け	くる	くれ
サ	寄	せ	する	すれ
タ	捨	て	つる	つれ
ナ	寝	ね	ぬる	ぬれ
				命令
				え(よ)
				け(よ)
				せ(よ)
				て(よ)
				ね(よ)

ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
(經)	褒	吠	流	植
へ	め	え	れ	ゑ
へ	め	え	れ	ゑ
ふ	む	ゆ	る	う
ふる	むる	ゆる	るる	うる
ふれ	むれ	ゆれ	るれ	うれ
へ(よ)	め(よ)	え(よ)	れ(よ)	ゑ(よ)

このうちア行に屬するものは「得」の一語だけであり、ワ行に屬するものは「植う」「飢う」「据う」の三語だけである。文語の下二段活用の語は口語では下一段活用として用ゐてゐる。

【四】上一段活用はイ段だけに活用し、それにル、レが添はつて活用することはいふ。その活用形の例は次の通りである。

み (未然) 花を見ず。
み (連用) 花を見たり。

(見)

みる(終止) 花を見る。
みる(連體) 花を見る人。
みれ(已然) 花を見れば、友を思ふ。
み (命令) 花を見よ。

上一段活用をなすものは口語では数が少くないが、文語で普通に用ゐるものは十語許である。その活用形は次のやうである。

行	カ	ナ	ハ	マ	ヤ
例	(著)	(似)	(乾)	(見)	(射)
未然	き	に	ひ	み	い
連用	き	に	ひ	み	い
終止	きる	にる	ひる	みる	いる
連體	きる	にる	ひる	みる	いる
已然	きれ	にれ	ひれ	みれ	いれ
命令	き(よ)	に(よ)	ひ(よ)	み(よ)	い(よ)

ワ (居) ゐ ゐ ゐる ゐる ゐれ ゐ(よ)

以上の表の外にあるものはナ行に「煮る」ヤ行に「鑄る」ワ行に「率ゐる」用ゐる等である。

【四】下一段活用はエ段だけに活用し、それにル、レが添はつて活用することはいふ。その活用形の例は次の通りである。

蹴

け	(未然)	見事に鞠を <u>け</u> ば愉快ならん。
け	(連用)	鞠を <u>け</u> たり。
ける	(終止)	鞠を <u>ける</u> 。
ける	(連體)	鞠を <u>ける</u> 人。
けれ	(已然)	鞠を <u>けれ</u> ば愉快なり。
け	(命令)	鞠を <u>け</u> よ。

下一段活用をなすものは口語では数が頗る多いけれども、文語では「蹴

る」といふ語一だけである。

カ	行	活用形
(蹴)	例	未然
け		連用
け		終止
ける		連體
ける		已然
けれ		命令
け(よ)		

【四】動詞の活用形では次の點に注意せねばならぬ。

- (イ) 未然形には下に「む」「ず」「ば」などがつくが「ど」「ども」はつかない。
- (ロ) 「とも」は動詞では終止形につく。
- (ハ) 終止形は活用形の上では口語と文語との差別の主眼になるものである。これを正確に認めると文語と口語との差別に迷はない。
- (ニ) 已然形は「ば」と共に「ど」「ども」のつくものであるが、これは已にあらはれた事を條件とする意味のものであるから、口語の場合と意味が違ふことを明確に知つてゐねばならぬ。
- (ホ) 命令形は四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用の場合は「よ」を付け

ても付けなくてもよいが、その外の活用の命令形には必ず「よ」をつけなくてはならぬ。

【四】文語の動詞の活用表

種類	例	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	行	か	き	く	く	け	け
ナ行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
カ行三段	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)
サ行三段	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ(よ)
上二段	起	き	き	く	くる	くれ	き(よ)
下二段	受	け	け	く	くる	くれ	け(よ)
上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	き(よ)

イ エ イ ア

ぬれすれ
ぬれすれ
ぬれすれ
ぬれすれ

エ

下	一段	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)
---	----	-----	---	---	----	----	----	------

この活用表について見ると次の事がわかる。

- (一) 四段活用では終止形と連體形とが同じ形であり、已然形と命令形とが同じである。
- (二) ナ行變格活用は六種の活用形が皆變つた形であらばはれてゐる。用言の活用形を六種にしたのはこのナ行變格活用を標準にしたのである。
- (三) ラ行變格活用は四段活用に似てゐるが、その終止形は連用形と同じ形でイ段にある。
- (四) カ行三段活用、サ行三段活用は未然形と命令形とが同じ形である。
- (五) 上下二段活用は未然形と連用形と命令形とが同じ形である。
- (六) 上下一段活用は未然形と連用形と命令形とが同じ形であり、又終

止形と連體形とも同じ形である。

【四五】文語の動詞の活用の見分け方

- (一)カ行三段活用、サ行三段活用、下一段活用はいづれも一種一語だけであるから、先づ諳記して置けば紛れることは無い。
- (二)ナ行變格は「死ぬ」「往ぬ」の二語だけであり、ラ行變格は普通に用ゐるのは「有り」の語だけであるから、それを諳記しておけばよろしい。
- (三)上一段活用の語は六行にわたつて活用するけれども普通に用ゐられるのは既にいうたやうに僅かに十語だけであるから、覚えておくのに困難は無い。
- (四)書かば「讀まむ」「習はず」などのやうに「ば」「む」「ず」などが「ア」段の音につくものは四段活用とナ行變格とラ行變格とである。
- (五)落ちば「起きむ」「朽ちず」などのやうに「ば」「む」「ず」などが「イ」段の音におくものは上二段活用と上一段活用とである。

- (六)受けば「榮えむ」「教へず」などのやうに「ば」「む」「ず」などが「エ」段の音につくものは下二段活用と下一段活用とである。

【四六】文語の動詞の活用形の見分け方

- (一)「ば」と「む」「ず」等のつく形 未然形
- (二)「て」のつく形 連用形
- (三)動詞そのままて言ひきる形 終止形
- (四)「こと」「もの」などのつく形 連體形
- (五)「ば」と「ど」「ども」のつく形 已然形
- (六)そのままて又は「よ」をつけて命令になる形 命令形

【四七】動詞は口語と文語とて其の活用が多少ちがふ。今之を比較して見ると、

- (一)四段活用の動詞は文語でも口語でも同じである。
- (二)文語の上下二段活用に屬する動詞は口語では全部上下一段活用

となる。

受		起		語幹
口	文	口	文	
下一段	下二段	上一段	上二段	活用 語尾
け	け	き	き	未然
け	け	き	き	連用
ける	く	きる	く	終止
ける	くる	きる	くる	連體
けれ	くれ	きれ	くれ	已然
け(よ)	け(よ)	き(よ)	き(よ)	命令

(三) 文語の上一段活用は口語でもやはり上下一段活用である。

(四) 文語のナ行變格活用は口語では連體形、已然形が次のやうにかはり普通の四段活用となる。

死	語幹
文	
變ナ	活用 語尾
格行	
な	未然
に	連用
ぬ	終止
ぬる	連體
ぬれ	已然
ね	命令

口	四段	な
に	ぬ	ぬる
ね	ね	

(五) 文語のラ行變格活用も口語では終止形が次のやうにかはり普通の四段活用となる。

有		語幹
口	文	
四段	變ラ	活用 語尾
段	格行	
ら	ら	未然
り	り	連用
る	り	終止
る	る	連體
れ	れ	已然
れ	れ	命令

(六) カ行三段活用は文語と口語とでは次のやうにちがふ。

(來)		語幹
口	文	
三段	カ行	活用 語尾
こ	こ	未然
き	き	連用
くる	く	終止
くる	くる	連體
くれ	くれ	已然
こ(よ)	こ(よ)	命令

(七) サ行三段活用は文語と口語とでは次のやうにちがふ。

(爲)		語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
		活用							
口	文	サ	行	せ	し	す	する	すれ	せ(い)
三段						する	する	すれ	せ(よ)

【四八】動詞の音便は文語でも、口語の場合と大體同じであつて、口語では「て」「た」に連なる時に起り、文語では「て」「たり」に連なる時に起るものである。次には文語を主とし、口語を對照して示す。

(一)「い」の音便

書きて… 書いて(文語)
 書いて(口語) (カ行四段)

漕ぎて… 漕いで(文語)
 漕いで(口語) (カ行四段の濁音)

(二)「う」の音便

問ひて… 問うて(文語)
 問うて(口語) (ハ行四段)

(三)「ん」の音便

飛びて… 飛んで(文語)
 飛んで(口語) (ハ行四段の濁音)

読みて… 読んで(文語)
 読んで(口語) (マ行四段)

死にて… 死んで(文語)
 死んで(口語) (ナ行變格)

(四)促まる音便

勝ちて… 勝つて(文語)
 勝つて(口語) (タ行四段)

從ひて… 從つて(文語) (ハ行四段)
從つた(口語)

取りて… 取つて(文語) (ラ行四段)
取つた(口語)

有りて… 有つて(文語) (ラ行變格)
有つた(口語) (ラ行四段)

以上の音便はいづれも四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用の語の連用形に起るものである。

【四九】動詞の假名遣 動詞の活用には、假名遣の上に、注意せねばならぬものがある。

(一) 動詞はすべて五十音圖の一段に限つて活用する。随つて一の語形を知れば、他の語形の假名遣は推して知ることが出来る。例へば「強ひ」がハ行に活用することを知れば、「強ゆ」は「強ふ」の誤りである

ことがわかる。

(二) 活用に「い」を用ゐる動詞は上二段ヤ行の「老い」「悔い」「報い」の三語だけである。随つてその終止形は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」である。

(三) 活用に「ゑ」を用ゐる動詞は下二段ワ行の「植ゑ」「飢ゑ」「据ゑ」の三語だけである。随つてその終止形は「植う」「飢う」「据う」であるが、これは誤りやすいから注意せねばならぬ。

(四) 動詞の活用がヤ行に屬するか、ハ行に屬するかを見わけけるには、終止形をはたらかせて、「フ」となればハ行だと知り、「ユ」となればヤ行だと知ればよい。「答ふ」は「答ゆ」とはいはないからハ行である。随つて「答え」は「あやまりて」「答へ」が正しいことがわかる。

(五) 下二段ヤ行の外に「え」とかく動詞は「得」「ア行下二段」だけである。

(六) 活用に「ゐ」を用ゐる動詞は上一段ワ行の「居る」「率ゐる」「用ゐる」の三語にすぎない。「用ゐる」は上二段ハ行に活用させることもある。

(七) 活用に「じず」を用ゐるのは「感ず」「論ず」「詠ず」「投ず」「サ行三段」の類だけである。

(八) ハ行四段の「う」の音便の假名遣は誤りやすいから注意せねばならぬ。例へば問ふて「は誤りて」問うて「が正しい」。

【語】動詞の敬語 動詞のうちで最初から敬語として成立つたものがある。それらは次のことばどもである。

(一) 敬稱

- あそばす います ます
- おはします まします おはす
- おぼしめす めす きこしめす
- しろしめす のたまふ たまふ
- 仰す わたらす (以上文語)
- あそばす くださる いらつしやる

おつしやる

(以上口語)

(二) 謙稱

- 申す 候ふ うけたまはる まつる
- たてまつる 奏す 奉ず 拜す 参拜す
- まゐらす 等 (以上文語)
- まうす いたす つかまつる いたゞく
- あがる まゐる うかがふ うけたまはる
- ぞんずる 参上する ます です ございます (以上口語)

本来敬語でない動詞でも、敬意の助動詞がつくと敬稱になる。助動詞の敬語については下に述べる。

練習 五

一次の動詞を口語か文語か又は口語、文語共通であるかを區別せよ。
着る 作る 居る 受く 落ちる 有り

返す 來(く) 散る 見る 捨てる 流れる

二、次の動詞を活用によつて區別せよ。

急ぐ 出づ 言ふ 死ぬ 感ず

住む 落つ 問ふ 受く 悔ゆ

三、次の動詞の活用形を表につくれ。

育つ 笑ふ 流る 煮る 有り

老ゆ 恨む 植う 蹴る (爲)す

四、次の文章の中から動詞を抜き出してその活用の種類と活用形とを

いへ。

(1) 林の奥にすだく蟲の音、空車、荷車の林を廻り坂を下り野路を横ぎ
る響、蹄で落葉を蹶散らす音。

(2) 降り暮す五月の空なれば、軒の玉水音も絶えせず、夜は衣を重ねる
まで冷かなり。

(3) 吹く風をなこその關と思へども、みちもせに散る山ざくらかな。

(4) 人は信念のために生き、主義のために戦ひ、本然のため死して悔い
ざるの覺悟あるを要す。

(5) 吾等一度人と約せばたとひ如何なる事情ありともみだりに變改
すべきものにあらず。

五、次の文に誤があつたら正せ。

(1) 知つて之を思はざれば知らざるに等し。 思ふて之を行わざれば
思わざるに等し。

(2) 悔ひても及ぶことではございません。(口語)

(3) わが植えてわが培いてならせたる茄子をちぎらん訪はせ我が君。

(4) 彼は人を救いたり。その行誠に感づるに堪えたり。

(5) 負ふた子に教えられて淺瀬を渡る。

六、次の動詞の見分け方を考へよ。

四段活用 上二段活用 下二段活用

七、動詞の假名遣について注意すべき點を説明せよ。

八、ナ行變格活用の語、ラ行變格活用の語は幾つあるか、又その語どもは口語ではどうなつてゐるか。

九、カ行三段活用、サ行三段活用の動詞は文語と口語とで如何なる差異を生じてゐるか。

第六章 助動詞

【五】助動詞は動詞の活用の附屬物であつて、動詞の或る活用形の下についてその動詞の働きを助けるものであつて、それが動詞の或る活用形についた時には、その間に他の語を入れることを許さないもので、それのついたものをそのまま一の動詞として取扱はなければならぬものであるといふことは既に述べたところである。

【五二】助動詞も形容詞、動詞と同じやうに、その用ゐられる場合によつて形をかへるものであるから活用を有するものであることは既に述べたところである。

【五三】助動詞は文語と口語とで著しい差がある。口語の助動詞の活用には下一段活用に似たもの、口語の形容詞の形をしたもの、特別のものなどがあるが、文語の助動詞の活用には下二段活用、ラ行變格活用、四段活用、形容詞の活用等のそれらに似たもの、或は全く特別のものなどがある。ここには文語の助動詞を主として説明する。

【五四】助動詞はその所屬から見て、三種に大別することが出来るものであるが、文語の助動詞では

(一)未然形附屬のもの

る らる す さす しむ ず ざり じむ

(二)連用形附屬のもの

き けり たり つ ぬ たし

氣持

(三)終止形附屬のもの
べし らし らむ めり まじ べかり まじかり
等である。次にこの類別に従つて、その意義、用法、活用をしらべて、行かう。

【五】る らる(口語での「れる」「られる」に相當する。)

勇ましき覺悟を要すと言ひ渡さる(渡される)
博覽達識を以つて世に稱せらる(稱せられる)

(一)上の例の「る」「らる」は共に動作を他から受ける意味即ち受身をあらはすに用ゐられる。又
一分間に二百米走らる(走られる)
高き峠も下駄にて越えらる(越えられる)

(二)上の例のやうになし得ること即ち能力をあらはすに用ゐられる

こともある。又

親類へ赴かる(赴かれる)

旅行先より歸宅せらる(歸宅せられる)

(三)此の例のやうに敬意をあらはすに用ゐられることもある。これらの助動詞はラ行下二段活用をなすものであつて、その活用形は動詞の場合と同じ方法で知ることが出来る。これは口語ではラ行下一段活用をなして「れる」「られる」の形をとる。(すべて終止形のある助動詞はその終止形の語形を以つて助動詞の名稱とする。)

口	語文			動詞
	書か	受け	書か	例詞
書か	受け	書か	未然	連用
れ	られ	れ	終止	連體
れ	られ	れ	已然	命令
れる	られる	る	接續	
れる	られる	る		
れれ	られれ	れれ		
れ(よ)	られ(よ)	れ(よ)		
四段	一三段二段	四段		

語
受け
られ
られ
られる
られる
られる
られ
られ(よ)
一三 段段

【五六】す さす (口語での「せる」させるに相當する)

馬を走らす(走らせる)

栗を籠に入れさす(入れさせる)

(一)上の例の「す」「さす」は共に他のものに動作をさせる意味即ち使役をあらはす。又、

琵琶をよくひかせ給へり。

皇太子殿下には北海道に行啓せさせ給ふ。

(二)上の例のやうに敬意をあらはすにも用ゐられることもあるが、この時は連用形だけが用ゐられる。これらの助動詞はサ行下二段活用をなすものであるが、口語ではサ行下一段活用をなして「せる」「させる」の形をとる。なほ口語の「せる」「させる」は使役をあらはすだけ

けて敬意をあらはすには用ゐられない。

動 例詞	未然	連用	終 止	連 體	已 然	命 令	接 續
書か	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	四 段
受け	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)	三 段
書か	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(よ)	四 段
受け	させ	させ	させる	させる	させれ	させ(よ)	一三 段段

【五七】しむ

字を書かしむ。

(1)上の例の「しむ」は他のものに動作をさせる意味即ち使役をあらはす。又

天皇陛下には大觀兵式に臨ましめ給へり。

(2)上の例のやうに敬意をあらはすこともあるが、この時は連用形だ

けが用ゐられる。この助動詞はマ行下二段活用をなすものであるが、口語には用ゐない。

動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書か	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)

【美】ず (口語での「ぬ」に相當する)

人は單獨に孤立して生活し得るものにあらず。上の例の「ず」は打消の意味をあらはす。これは一種特別の活用をなすもので、口語にもあるのであるけれど、その終止形が「ぬ」であるところと違ひがある。その活用は次の通りである。

動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	書か	ず	ず	ず	ぬ	ね
書か	ず	ず	ず	ぬ	ね	○

口語	書か	ず	ず	ぬ	ぬ	ね	○
----	----	---	---	---	---	---	---

【丑】ざり じ

かかる事は夢にだに思はざりけり。
「未だ遠くは行かじ。それ追へ」と下知したり。

上の例の「ざり」「じ」は打消の意味をあらはす。「ざり」「は」「ず」と「あり」とが結合したものであり、「じ」は多少疑ひながら打消するので口語でいへば「ないだらう」にあたる。これらの活用は「ざり」「ざり」はラ行變格活用に似、「じ」は特別な形をもつてゐる。さうして、この二は口語には用ゐない。

動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書か	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	○
書か	○	○	じ	じ	○	○

【六〇】む (口語での「う」ように相當する)

明日或は雨降らむ。降らう。

心清く、思ひ純なれば、徳必ず成就せむ。成就しよう。

上の例の「む」は前もつて後の事を想像する意味をあらはす。「む」は特別の活用をなすもので、次のやうに、終止形、連體形、已然形があるだけである。

動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書か	○	○	む	む	め	○

【六一】未然形附屬の助動詞は上に擧げた通りであるが、之をまとめて見ると、次のやうになる。

- (イ) 受身、能力、敬意をあらはす。…る(れる) らる(られる)
- (ロ) 使役、敬意をあらはす。…す(せる) さす(させる) しむ

(ハ) 打消の意味をあらはす。…ず(ぬ) ない) ざり じ

(ニ) 未來想像の意をあらはす。…む(う) よう)

【六二】き けり (口語での「た」に相當する)

うれしきことも多かりき。(多かつた)

千里よせ來る海の氣を吸ひてわらべとなりけり。(なつた)

上の例の「き」「けり」は共に過ぎ去つたことを思ひ出しそれをいひあらはすものである。その活用形は次のやうである。

動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書き	○	○	き	し	しか	○
書き	○	○	けり	ける	けれ	○

「き」は三段活用の語には次のやうに特別な接續のしかたをする。

(來) こ(未然) しか
き(連用) しか
 (爲) せ(未然) しか
し(連用) き

【六三】 つぬ たり(口語での「て」に相當する)

外に出て月を見る。

農夫の唄も聞えつ(聞えた)

日は既に暮れぬ(暮れた)

月は出てたり(出た)

上の例の「つぬ」たりは共にその事の了つた意味をあらはすものである。その活用は「つ」はタ行下二段活用に「ぬ」はナ行變格活用に「たり」はラ行變格活用に似た活用をする。口語の「て」は連用形だけであり、口語の「た」は文語の「たり」の變化したものである。

の動
例詞
未然
連用
終止
連體
已然
命令

	口語		文語		
	書い	書い	書き	書き	書き
	たら	○	たら	な	て
	たり	て	たり	に	て
	た	○	たり	ぬ	つ
	た	○	たる	ぬる	つる
	○	○	たれ	ぬれ	つれ
	○	○	○	ね	て(よ)

【六四】 けむ

前世の芳縁も淺からずや思はれけむ。

上の例の「けむ」は過去の事を想像する意味をあらはすものである。口語にはこれはない。「ただらう」を用ゐて、その意味をあらはす。

の動	の動
例詞	例詞
未然	未然
連用	連用
終止	終止
連體	連體
已然	已然
命令	命令

「けむ」の活用形は前の通りである。

【六五】たし (口語での「たい」に相當する)

室内にては靜肅にせられたし(されたい)

上の例の「たし」は希望の意味をあらはすに用ゐられるものである。活用形は形容詞とひとしい。

		の動 例詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	書き		たく	たく	たし	たき	たけれ	〇
口語	書き		たく	たく	たい	たい	たけれ	〇

【六六】連用形附屬の助動詞は上に述べたが、之をまとめてみると次のやうになる。

- (イ) 過去の追想の意をあらはす…き けり(た)
- (ロ) 完了の意をあらはす…つ ぬ たり(て た)

(ハ) 過去の想像の意をあらはす…けむ

(ニ) 希望の意味をあらはす…たし(たい)

【六七】べし

(一) 菊の咲きほこり紅葉の色づくも此の頃なるべし(此の頃だらう)
—— 推量

(二) 純情もつて人に對すれば、人をして我が言の悉くを信ぜしむべし。
(信ぜさせることが出来る)—— 可能

(三) 三人の子と生れては必ず親に孝なるべし(孝でなければならぬ)——
義務

(四) 校内にては必ず革靴を使用すべし(使用するがよい)—— 勧誘

「べし」は上の例のやうに推量、可能、義務、勧誘等の意味をあらはすのに用ゐられる。これは口語には無い。その活用形は形容詞く、し、き活用に等しい。

動詞例詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書く	書く	書く	べし	べき	べけれ	○

【六八】べかり

軽々しく人と争ふべからず。

進みて戦ふべかりしを恐れて戦はず、恥を後世にのこせり。

上の「べかり」は「べし」と「あり」とが結合して生じたのでラ行變格活用のやうに活用するものであるが、普通に用ゐられるのは未然形と連用形とである。口語には用ゐぬ。

動詞例詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書く	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ	○

【六九】らむ むり

何方に心ざしてか日盛りのやけたる道を蟻のゆくらむ(だらう)

立田川紅葉みだれて流るむり(流てゐるやうだ) わたらば錦なかなやたえなむ。

上の例の「らむ」はその事を多少うたがひながらおしはかる意味を示すものであり、「むり」は大方さうだらうと推量する意味を示すものであるが、いづれも口語には用ゐないものである。その活用は特別のもので、いづれも終止形、連體形、已然形の三活用だけをもつてゐる。

動詞例詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書く	○	○	らむ	らむ	らめ	○
書く	○	○	めり	める	めれ	○

【七〇】らし (口語での「らしい」に相當する)

さよなかと夜はふけぬらし(らしい) 雁がねの聞ゆる空に月わた

る見ゆ。

上の例の「らし」はその事を推量する意味を示すものである。口語の「らしい」は口語の形容詞に似た活用をもつてゐるが、文語の「らし」は下の如く、終止、連體、已然の活用形が同じ形である。

	動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	書く	○	○	らし	らし	らし	○
口語	書く	○	らしく	らしく	らしい	○	○

【七】まじ まじかり (口語での「まい」に相當する)

よも忘れはすまじ(すまい)覺悟せよ。

上の例の「まじ」はその事をうちけす心で推量する意味をあらはすものであつて、形容詞しく、しき活用に似た活用をする。口語では「まい」といふ形が終止と連體とに用ゐられるだけである。

	動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
文語	書く	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
口語	書く	○	○	まい	まい	○	

人のほむまじかりける行かな。

「まじかり」は「まじく」と「あり」とが結合したものである。これはラ行變格活用のやうな活用をするものであるが、普通に用ゐられるのは未然形の「まじから」と連用形の「まじかり」とである。

【七】以上終止形附屬の助動詞を述べたから、これをまとめて見ると次のやうになる。

- (イ) 推量その他種々の意をあらはす。……べし べかり
- (ロ) 疑ひつゝ、推量する意をあらはす。……らむ
- (ハ) 推量の意をあらはす。……らし(らしい) めり

(二) 打消しながら推量する意をあらはす。…まじ(まい) まじかり
右を通じて見るといづれも推量の意味をあらはすに用ゐる助動詞で
あることがわかる。

【七三】 以上、文語の助動詞を主として説いて來、その文語の助動詞から多
少變化して生じた口語の助動詞をも少しく説明したのであるが口語
の助動詞の中には文語の助動詞と違つたものがある。たとへば「ない」
などは口語には用ゐて文語には用ゐない。又口語で特別の形をした
ものに「て」「う」「よう」「まい」などの助動詞があるが「て」は連用形だけ其の
他は終止形だけしか用ゐない。又文語にだけ用ゐて口語に用ゐない
ものもある。それは「しむ」「けり」「ぬ」「べし」「き」などである。

【七四】 吉野山みねの櫻やさきぬらむ。

我れはやさしき母の御手に育てられたりき。

この兒才あり、如何にも師を撰びて學ばしめらるべし。

助動詞は只一つを附けるだけでは意味が十分でない時には、上の例の
やうにいくつかの助動詞を下に下にとかさねてつける事がある。右
のやうに助動詞をいくつも連結してゐる場合には先づこれの一つ一
つの助動詞に分解し、その各々のあらはす意味を考へて、それからその
全體の意味を總合して知らねばならぬ。

練習 六

一、次の文の中から助動詞を抜き出せ。

- (1) 日影はやうやくわがもとに來りぬ。
- (2) 恩賞を受けたりき。
- (3) 世界第一と稱せらる。
- (4) 神妙といふべし。
- (5) 夜を日につぎて馳參じたり。
- (6) 言ふべき言葉を知らず。

(7) 袖をぬらさぬものもなし。

二次の助動詞について文語か口語かを明かにして、その活用とそのあらはす意味とをいへ。

- (1) 繪を書かしむ。
- (2) 書を読みたり。
- (3) 成功と思ひぬ。
- (4) 雨も降らず。
- (5) つまらぬ事は思ふまい。(口語)
- (6) その説は取らぬ。(口語)
- (7) 母に教へらる。
- (8) 小鳥は鳴きけり。
- (9) 雪景色が見たい。(口語)
- (10) 君の馬前にこそ死なぬ。

(11) 仕事を爲よう。(口語)

三次の文章の中から助動詞を抜き出しその活用をいへ。

- (1) 登ればのぼる道はありけり。
- (2) 名刀を興へて行かしめたり。
- (3) まだ見たことはありませぬか。(口語)
- (4) 思はず大聲をあげて泣き叫びぬ。
- (5) すべて希望は大きくなければならぬ。(口語)
- (6) 盛なりと言ひつべきなり。
- (7) 村里は深く眠りぬ。
- (8) 能くこの語に現はれたりといふべし。
- (9) 降積る雪は寧ろ平和な感じを抱かせる。(口語)
- (10) 夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に満ちた。(口語)

四次の文章の中の助動詞を抜き出しその活用とそのあらはす意味と

をいへ。

- (1) 観る者をして懐古の情にたへざらしむ。
- (2) うつくしく消えそめにけり。
- (3) 冬枯の景色こそ秋にはをさく、劣るまじけれ。
- (4) これに匹敵するものを他にもとむべからざるは勿論なり。
- (5) 櫛の林の中に入りぬ。進み行けば水聲喧しく聞え始めて四面の林木に反響す。湯瀑の近づきたるなるべし。
- (6) ひとの親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな。
- (7) ふるさとに今宵ばかりの命ともしらてや人の我を待つらん。

第七章 副詞、接續詞、感動詞

【七五】副詞は用言の上に副うてその意味を委しくするに用ゐる詞であつて、活用の無い語であることは既に述べたところである。

【七六】副詞にはそのまま用ゐられるものと、助詞を付けて用ゐられるものがあり、助詞の附くものにも「に」の附くものと「と」の附くものがある。今その例をあげて見ると、

(1) 助詞をつけないで用ゐられるもの

はなはだ	いと	すこぶる	かならず
もつとも	是非	まさか	いさ
つゆ	あに	いかで	けだし
さながら	いかにも	ことさら	など

(2) 助詞「に」をつけて用ゐられるもの。

ほのかに	しづかに	たひらかに
にこやかに	ねんごろに	おもむろに
正確に	自然に	切に
		優に

(3) 助詞「と」をつけて用ゐられるもの。

からくくと さわくくと しづくくと
 ほのほのと さらりと きりりと
 繽紛と 髣髴と 窈窕と 聯綿と
 昭々と 欣然と 溫乎と 凜と

【七七】副詞の多くのものは状態を委しくするものであるが、又他の副詞の上に副うてその意味の程度を委しくするものと、下の用言のいひ方に一定の約束をもつてゐるものがあることは既に述べたところである。

【七六】副詞の敬語 副詞には本来の敬語といふものは無いが、普通の副詞の上に「おん」「お」をつけ又は下に「さま」をつけなどして敬語をつくることがあるといふことは既に述べたところである。

【七五】接續詞は上下の語を連ね又は文と文との間に入つてその意義を結びつけるに用ゐられる詞であることは既に述べたところである。

【八〇】感動詞はすべて物事に感じた時などに發する詞であることは既に述べたところである。

【八一】感動詞は

ああ
いざ

といふやうに、單獨に用ゐられることもあるが、多くは

ああわが思ひは足りぬ。

いざあすは故郷へ歸らむ。

のやうに他の語句の上に用ゐられる。

【八二】副詞接續詞、感動詞は口語に慣用するものと文語に慣用するものとの區別は多少あるけれども、文法の上から見れば、別に取扱方に差異は無い。

練習 七

一、次の文章から副詞、接續詞、感動詞を抜き出して、それが用ゐる方を説明せよ。

(1) いや、こいつは大きい。早くちよつとその襤ク網モと一人が遽しく叫ぶ。(口語)

(2) 只管修養に志せば、終には徳行成るべし。

(3) 共に和漢の學に通じ、其の著作は國文學中最も勝れたるものとして、今なほ愛讀せらる。

(4) 故郷の慕はしきは必ずしも山水の美なるが爲に非ず、又風土の住みよきが爲にも非ず。

(5) 知りて行ひしか、抑も又知らずして行ひしか。

(6) 配合よろしからざる時は滑稽となり、或は下品となることあるべし。

(7) 先生に對し、學友に對し、必ずはつきり言葉に出して挨拶せよとは

學校の平素の教育である。(口語)

(8) ああ、思へば少女の一念はよく幾多の尊き生命を救へるなり。

(9) 諸車通行止。但し空車はこの限にあらす。

(10) 霧雨のこまかにかゝる猫柳つくづく見れば春たけにけり。

二、次の副詞、接續詞、感動詞を用ゐて短い文を作れ。

曾て ゆめ あはれ 蓋し 即ち

いやしくも 敢へて すこやか

只管 ただ 又 いざ

第八章 助詞

【八三】助詞は他の詞の下に附屬して、その詞と他の詞との關係を明かにする爲めに用ゐられる詞であつて、活用をもたず、又獨立して一つの考へをあらはすはたらきをもたないものである。

【八四】助詞は他の詞に伴つて用ゐられてゐる状態とその示す関係とから見て六種類に分けることは既に述べたところである。助詞には文語と口語とに共通してゐるものも少くないが、又文語だけのものがあり、口語だけのものもある。文語にも口語にも共通してゐる助詞でも文語と口語との上で多少意味なり性質なりのちがつたものもある。ここには文語を主として説く。

【八五】格助詞は詞と詞との間の一定の關係を示す助詞で、文語では
の が を に と へ より から

の八であるが、これらは口語も大體同じである。右のうち「が」は文語ではあまり用ゐない。「に」と「へ」とはまちがつてつかひやすいから注意せねばならぬ。「に」は場所を示し「へ」は方向を示す助詞である。又「より」と「から」とはよく似てゐるが「より」は文語に多く用ゐる「から」は口語に多く用ゐる。口語には「て」といふ助詞が之に屬する。この種類の助詞はその

指すところが嚴密にきまつてゐて、同類の助詞をみだりに重ねて用ゐることの出来ないものである。

【八六】接續助詞は用言に附いてその用言と次の語句とを接續させる助詞であるが、

ば……………風吹けば浪も立てり。
とも……………道は千里を隔つとも心は如何で隔つべき。
と……………人は見ると我はみじ。
ど……………讀まんとすれど讀みかねたり。
ども……………靜かに思へども名案浮ばず。
が……………見物は多きが品物は賣れず。
に……………屢試みたるに一度も功を奏せず。
を……………花は咲けるを鳥は來なかず。

の八である。この種の助詞には順に續く條件を示すものと、反對の結

果を導く条件を示すものと、單に前後を接續させるものがある。さうして「ば」は未然形についてまだ定まらぬ事を示す時と、已然形について已に在る事を示す時とある。口語では「も」「し」といふ助詞があり、又「が」に對して「ところ」が「に」に對して「の」に「を」に對して「もの」を用ゐることが多い、この接續の助詞が上にある用言を受けるには一定のきまりがある。

(1) ば
(イ) 未然形を受けるもの……… 假定の条件をあらはす。
(ロ) 已然形を受けるもの……… 既定の条件をあらはす。

(2) と、とも
(イ) 形容詞は未然形をうける。 反對の結果を導く假設條件をあらはす。
(ロ) 動詞は終止形をうける。 件をあらはす。

(3) ど、ども
已然形をうける。……… 反對の結果を導く既定条件をあらはす。

(4) が、に、を
すべて連體形をうけ、前後の事實を綜合する。

(5) と、し
口語の助詞で、連體形をうける。「と」は同時に在る事件を合せいふ性質のものであり、「し」は句を重ねるに用ゐる。

【八七】副助詞はいろ／＼の語にそはつて下に來る用言の意味に關係を及ぼす助詞であるが、文語では

- だに……… 花だに咲かず。
- すら……… 道すら知らず。
- さへ……… 雪さへふりいでぬ。
- のみ……… 聲のみ大なり。
- ばかり……… 曉ばかりうきものはなし。
- まで……… 大臣にまでなりぬ。
- など……… 櫻など見事に咲けり。

の七であるが、口語では上のうちの「ばかり」まで「など」と専ら口語に用ゐる「やら」だけ「ぐらゐ」「か」が之に屬する。

【八八】係助詞は用言の言ひ方に力を及ぼす助詞であるが、文語では次の八である。これは種々の語に添はつて下にある用言に力を及ぼす場合「係」と用言その他に添はつて文句の終となる場合「結」とがある。

は 係……人は萬物の靈長なり。
結……これは重いは。

も 係……東も西も海ばかりなり。
結……あまの小舟のつなでかなしも。(古語)

ぞ 係……汝何ぞ吾が言を信ぜざる。
結……さてはいづこへゆくべきぞ。

なむ 係……其の人かたちよりは心なむまさりける。
結……鳥もなかなむ。(古語)

こそ 係……ちればこそいとど櫻はめでたけれ。
結……彼は頑固だ。人の忠告を聴かばこそ。

や 係……月や出でたる。
結……わが思ふ人ありや、なしや。

か 係……如何なることをかつとむべき。
結……雲か霞か、はた雪か。

な 係……目なかけそ。(古語)
結……人に語るな。

「こそ」が係となる場合には下の用言は已然形で結び、「ぞ」「なむ」「や」「か」が係となる時は下の用言は連體形で結ぶ。「は」「も」が係となる時には終止形で結ぶ。之を係結の法則といふ。口語の時にはいつでも終止形で結ぶ。しかし下の語句に續けられる場合には結が無くなる。口語での係助詞は上のうちの「は」「も」「こそ」と「さへ」「でも」「しか」の六であるが、これらは「は」の外は結にはならぬ。

【八九】終助詞は常に文句の終りにばかり用ゐられる助詞であるが文語

では

がな……………世の中にさらぬわかれのなくもがな。

かな……………あなつかしきかな。

か……………うつせみの世にも似たるか。

かし……………誠にあはれなりかし。

の四が普通に用ゐられるものである。口語では「か」「疑」「え」「ろ」「な」「禁」「な」「感」「さ」などがある。此の種の助詞には感動、希望などをあらはすものが多い。

【九〇】間投助詞は語調をととのへ、語勢をそへ、呼掛、感動の意などをあらはす助詞であるが文語では

よ……………花を見よ。

や……………古池やかはづとびこむ水の音。

し……………まつとしきかば今かへりこむ。

な……………汝は平家の侍よな。

等があるが、口語では「ぞ」「ね」などがある。この類の助詞は他の助詞に比して用ゐる方が比較的に自由である。

【九一】助詞の「を」「へ」「さ」「へ」「ぐらゐ」「は」などは書きあやまり易いからその假名づかひに注意せねばならぬ。

練習 八

一、次の文章の中から助詞を抜き出してそれらの性質を區別せよ。

(1) 教へられたとほりにそのまま守つてゆくのは勿論素直なことである。しかし教へられただけを守ることとはかならずしも權威あることではない。(口語)

(2) 胸は希望の調べに高鳴り、眼は歡喜の涙にうるほひ、口に純一の歌を口吟む。

(3) 少年を人生の春とすれば、春は天地の少年なり。

(4) 地上の星を花といひ、み空の花を星といふ。

(5) ほのくくと明石の浦の朝霧に鳥がくれゆく舟をしぞ思ふ。

(6) 太平の世にすら然り。いはんや亂世に於てをや。

(7) 庭の雪は犬の足跡より消えそめて野も山もやがて元の姿となりぬ。

(8) 急がずばぬれざらましを、旅人のあとより霽るる野路の村雨。

二次の文章の〇の處に適當な助詞を補へ。

(1) 孟子〇母〇孟子〇教育するため〇三たびその居〇移したり〇いふ。 孟子〇他日大儒〇なりし〇全く母〇教育〇よれり〇言ふべし。

(2) 思ふ念力岩〇〇透す〇いふ諺の如く勉強〇〇すれ〇どんな事〇〇出來ぬ〇いふ事〇ない。(口語)

(3) 目の前に不用なり〇〇妄に物〇捨つべからず。 諺に「禍〇三年立

て〇用〇なす〇〇言ふ〇あらず〇。

(4) 不自由〇常〇思へ〇不足なし。 心に望おこら〇困窮したる時〇思ひ出すべし。 堪忍〇無事長久〇基。 怒〇敵〇思へ。 勝つことばかり〇知つて負くること〇知らざれ〇害其身〇いたる。

(5) 人の創造にまでの努力。 そこには時代〇導く情熱〇ある。 撓ま
ず屈せざる心〇革新〇ある。 因襲〇對する不斷〇反抗〇ある。
素朴なもの〇の愛〇ある。 眞に純粹なもの〇求めてやまない熱
〇ある。(口語)

(6) 藝術のための藝術か。 生活の爲め〇藝術〇。 昔〇〇此れ〇大きな問題〇あつた。(口語)

第九章 詞の轉成

【九二】

(一) 功績燦然としてひかりかがやけり。
偉勳のひかり青史を照らせり。

(二) あはれ勇ましき振舞かな。
さく人何れもあはれを催せり。

上の例において(一)の「ひかり」は本来の動詞としての用をなしてゐるが、(二)の「ひかり」は轉じて名詞となつてゐる。又(二)の「あはれ」は本来の感動詞であるが、(一)の「あはれ」は轉じて名詞となつてゐる。このやうに詞は必要に応じて他の種類に轉じかはることがある。

【九三】 名詞に轉成したものを。

(一) 動詞の連用形から。

ひかり かすみ こほり さし はかり
おび あふぎ のし ながめ たたみ

(二) 用言の語幹から。

あか あを しろ たか やど うた

(三) 感動詞から。

あはれ

【九四】 形容詞に轉成したものを。

(一) 體言から。

大人し いさをし 黄色い(口語)

(二) 副詞から。

甚し(甚だ) のどけし(のどか) いまだし(いまだ)

(三) 動詞から。

いさまし(いさむ) なつかし(なつく) さわがし(さわぐ)

(四) 他の詞から。

男々し 女々し にながし
なれなれし ひどい(非道)(口語)

【九五】動詞に轉成したものの。

(一) 名詞から。

くび(頸)る また(股)ぐ つな(綱)ぐ

(二) 漢語から。

さうぞく(裝束) れうる(料理) こじく(乞食)

【九六】副詞に轉成したものの。

(一) 動詞から。

みだりに 頻りに たがひに

(二) 形容詞の語幹から。

しづしづ はやばや

練習 九

次の文の中から轉成した詞を抜き出し、原の詞を考へて見よ。

(1) 謠ひをうたひ舞ひをまふ。

(2) あか、あを、しろなどの繪具でうつくしい草花を描いた。(口語)

(3) 遠山はかすみのうすものをつけたり。

(4) 懐しき故郷に歸りて慕はしの友と語りなどしき。

(5) のどけき春の日野邊に遊ぶ。

(6) 實ににがにがしき事なり。

(7) なれなれしい様子で語り合つた。(口語)

(8) 眺はるけき大海原。

(9) 彼は僅かに読み書きの心得あるのみ。

(10) げにいさましといふべし。

第十章 接 辭

【九七】あはれさに堪へずして袖をしぼりぬ。

うらさびしくも見えわたるかな。

あられたばしるなすのしの原。

上の例の中の「さ」は感動詞「あはれ」の下についてこれを名詞とし、「うら」は形容詞「さびしく」の上につき、「た」は動詞「はしる」の上について、これらの詞に力を添へるに用ゐられる。これらは一定の意味はあるけれども、直接に文句の組立てに用ゐられるものではない。このやうなものを接辭といふ。そのうち語の上に用ゐられるものを接頭辭といひ、語の下に用ゐられるものを接尾辭といふ。

【九】接頭辭は體言、用言、副詞の上に加へて、語調や意義をそへる。其の中の主なものをおげる。

さ	夜	さ	迷ふ	み	空	み	雪
け	近し	け	疎し	か	弱し	ひ	弱し
た	やすし	た	なびく	ま	心	ま	晝
き	まじめ	す	顔	を	川	こ	山
						う	ひ孫

はつ雲 ふ心得 ぶ作法 第一

【九】接尾辭には體言、用言、副詞又はそれらの語幹について體言、用言、副詞等の資格を示すものがある。

(一) 名詞の資格を示すもの。

深み	高み	重み	青み	遠さ	悲しさ	かへるさ
大膽さ	寒け	眠け	大人げ			

(二) 形容詞の資格を示すもの。

女らし	子供らし	學者らし	露けし
議論がまし	勝手がまし	古めかし	

(三) 動詞の資格を示すもの。

春めく	時めく	上手めく	學者めかす
ほのめかす	音なふ	黄ばむ	をかしがる
寒がる	學者ぶる	賢人ぶる	大人ぶ
			鄙ぶ

(四) 副詞の資格を示すもの。

うれしげ 心地よげ 花やか うれしさう
【100】 敬語のうちには接辭を加へることによつてはじめて敬語となるものが少くない。敬意の接辭には接頭辭もあり、接尾辭もある。これらを加へたものはすべて敬稱となるのである。

(一) 敬意の接頭辭は「み」「大御」「おん」「お」「ご」「ぎよ」「おみ」等である。

(イ) 名詞、數詞に冠したものの。

み心 大御稜威 おん徳

お友達 お認め おみあし(口語)

ご老人 御感動 御意

お二人(口語) お一人(口語) おいくつ(口語)

(ロ) 形容詞に冠したものの。

おんうるはし おうつくしい(口語)

(ハ) 副詞に冠したものの。

おんすこやか 御壯健 おあいにく(口語) ごゆつくり(口語)

(二) 敬意の接尾辭 「上様」「殿」「御」「さま」「さん」「どん」がた「くん」「ご」等である。

(イ) 名詞につけたもの。

父上 母様 山村殿 神さま 叔母さん(口語)

宮様がた 大佐どの 長松どん(口語) 高山くん 嫁御 妹ご

(ロ) 代名詞につけたもの。

どなたさま(口語) あなたさん(口語) お前がた(口語)

(ハ) 副詞につけたもの。

いかがさま(口語)

(三) 接頭辭「お」「ご」等と接尾辭「さま」「さん」「どの」「どん」等とをつけたものもある。

(イ) 名詞につけたもの。

お嬢さま(口語) お医者さん(口語) ご尊父さま
 ご隠居さん(口語) おぢいさん(口語) お松どの(口語) お竹どん(口語)
 (口) 副詞につけたもの。

おあいにくさま(口語) おまちどほさん(口語) ご退屈さま(口語)

練習 十

一次の文の中にある接辭がどんな働きをしてゐるかを考へよ。

- (1) 木々の梢もはや黄ばみたり。
- (2) 笥の雫ならではつゆ音をふものなし。
- (3) 鳥の聲などもことの外に春めき渡りぬ。
- (4) 大人ぶることは少女のすることではありません。(口語)
- (5) さ夜ふけてほの暗き燈の影ものさびし。
- (6) 女らしく振舞へ。
- (7) その状は種々にしてみやびたるもひなびたるも見ゆ。

(8) 吾らの友だちに同じ名の人三人あり。

二次の接辭のつく語を各三つ以上いへ。

こ さ み お ま (接頭辭)
 げ ら たち み さ (接尾辭)

三、敬意の接頭辭と接尾辭とを用ゐて、種々異なつた敬語を十語つくつてみよ。

第十一章 詞の合成

【101】 人々の眼前には明るい横濱の港が開けて來た。(口語)

やはり我々日本人が國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。(口語)

上の例の「人々」「我々」は同じ語を重ね合はせて一にしたものであるが、文法上には一つの詞として取扱はれてゐる。かやうに同じ語を重ね合

はせて一の語の取扱になるものを疊語といふことがある。疊語には次のやうなものがある。

(一) 體言の疊語

人々	山々	我々	だれだれ
年々	様々	一々	三々五々

(二) 用言の疊語

はやばや	ちかぢか	うすうす
たえだえ	泣く泣く	かへすがへす

(三) 副詞の疊語

なほなほ。 ゆめゆめ。 いでいで。

【110】 磯城島の大和心を人間は、朝日にほふ山櫻花。

今度の行幸には八丈島測候所及び神戸海洋氣象臺をみそなはせられた。(口語)

上の例の「磯城島」「大和心」「朝日」「山櫻花」「八丈島測候所」「神戸海洋氣象臺」は幾つかのちがつた詞を重ね合せて一にしたものであるが、これらも文法上には一の詞として取扱はれてゐる。かやうなものを熟語といふことがある。

【111】 熟語は日常盛んに用ゐらるゝものであるが、それには次のやうなものがある。

(一) 熟語の體言

野山	蓮池	蕨餅	近道	朝顔	讀み物	卵色
どこそこ(口語)	五十錢	一枚看板				

(二) 熟語の用言

心細し	物憂し	薄暗い(口語)	有り難い(口語)	狭くるしい(口語)
心指す	物語る	近づく	落ち入る	

(三) 熟語の副詞

いかほど さほど いかやう
さやう なほさら ことさら

【107】 連濁音

ひとびと ときどき ところどころ
やまざくら のぎく たにがは

みぐるしい(口語) ありがたい(口語) 近づく

上の例のやうに疊語、熟語を作る時に下の詞の初めの音が濁ることがある。かやうなものを連濁音といふ。やまかはとやまがはとのやうに連濁の有無で意味のちがふこともある。この連濁音はいろくの場合に起るものである。たとへばサ行三段活用の「する」が上に他の語をうけてそれと一になる場合に往々「ずる」となるのもやはり連濁音なのである。たとへば

我々の重んずるのは道德である。(口語)

如何してかやうな妙技を演ずるのであるか。(口語)

是眞の最も長ずる所は蒔繪にあり。

少佐は歸航準備を命じた。(口語)

又動詞の音便のうちにも上の音の關係で下の助動詞の「た」「て」「が」「だ」「で」となることがある。

馬が茶の木に繋いである。(口語)

今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が忽ち愉快さうにかち

かちと音を立て始めた。(口語)

雞がきよとくと遊んでゐる。(口語)

遠く遠く眼のとゞく限り白く霞んでゐる。(口語)

私たち同勢七人はその小舟に乗りこんだ。(口語)

【108】 轉音

かざぐるま(風車) ひやみづ(冷水)

つまづく(爪突く) まばゆし(目映し)

のやうに熟語となるが爲に上の語の終の音が轉ずることがある。これを轉音といふ。語によつては「かざぐるま」「つまづく」「まばゆし」のやうに連濁音と轉音とが伴つて起ることもある。

【106】ラ行變格活用の動詞「あり」は、其の用法が非常に廣くて、様々の詞と結合して用ゐられることがある。形容詞、動詞、助詞等と合成したものを次にあげよう。

【107】形容詞と「あり」との結合

誠に面白かりき。

かなしかりけることも多かりき。

美しかりける花も今は全く散りはてぬ。

上の例の中の「面白かり」「かなしかり」「美しかり」は形容詞の連用形「面白く」「かなしく」「美しく」が「あり」と結合しその連用形の「く」と「あり」とが約つて一

になつて「かり」となつたので、ラ行變格活用と同じ活用になつてゐる。

このやうな詞はその形は動詞のやうであるけれどもその意味は形容詞に似てゐるから、特に之を形容動詞と名づけることがある。口語ではその未然形、連用形だけが用ゐられる。

【108】動詞と「あり」との結合

四段活用の動詞及びサ行三段活用の動詞の連用形から「あり」につづくものが一になつて、

- 行きあり……………行けり
- 爲しあり……………爲せり
- 立ちあり……………立てり
- 言ひあり……………言へり
- 読みあり……………読めり
- 切りあり……………切れり

……………四段



しあり……せり……サ行三段

のやうな形となることがある。これはラ行變格活用に似てゐるが、今日では終止形、連體形の外は用ゐない。その意味はその作用の存續してゐる事をあらはすものである。この形は四段活用及びサ行三段活用に限るものであるのに、往々下二段活用の動詞にも之を濫用して「受けり」「捨てり」「籠めり」などいふことがあるが誤である。これは口語には無い。

【109】 助詞と「あり」との結合

助詞「に」と「が」あり」と結合すると約つて「なり」「たり」といふ形になる。活用はラ行變格活用のやうであつて、體言や副詞、時に動詞につけて用ゐられる。

(一) 體言につけて用ゐる場合、

正成は忠臣なり。

父は大臣なり。

君君たり臣臣たり。

上の例のやうに「なり」「たり」は體言について事物を指し示す意味をあらはすもので指定動詞といふことがある。この「なり」「たり」は口語には無い。

(二) 副詞につけて用ゐる場合、

態度堂々たり。

辯舌滔々たり。

林靜なり。

室内明なり。

上の例の「たり」なり」は「堂々と」「滔々と」「靜に」「明に」のやうに用ゐられる副詞附屬の助詞に「と」「あり」との結合し約つたものである。之も形容動詞といはれることがある。口語では「靜なり」の連體形「靜なる」の「る」を

省いて「静な」などと用ゐるが「たり」は用ゐない。

(三)「なり」を動詞につけて用ゐる場合。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

皆人は花の衣になりぬなり。

普通「なり」は用言の連體形につくが、上のやうに終止形につく事もある。その時にはその上の語の意味を強めるはたらきをあらはす。

【一〇】「あり」はなほ助動詞と結合することがある。「ずあり」が「ざり」「まじくあり」が「まじかり」「べくあり」が「べかり」「てあり」が「たり」となるやうなのはその例である。これらは既に助動詞として説明した。指定動詞の「たり」とこの助動詞の「たり」とは形は同じ様でもその意義用法はちがつてゐるから注意せねばならぬ。

【一一】口語の「だは」で「とある」との結合したものの「る」の省かれたものであらう。「である」に「ます」を加へて「であります」となると敬意をもつ。別

に「です」といふ語があつて、それも同様に用ゐられるが、これらのことは既に述べたところである。

【一二】「あり」と合成した語ではないが、「なり」「たり」に代用せられる語に「にして」「して」「にて」と「す」がある。

海平かにして鏡の如し。

秋深くして満樹金よりも黄なり。

春の夜は曇りがちにて朧月多し。

氣比神社は由緒ある神社にてて官幣大社とす。

などはその例である。

練習 十一

一、次の文の中から疊語と熟語とを抜き出せ。

(1) 家々皆國旗をあげて歡迎の意を表せり。

(2) 實るほど頭のさがる稲穂かな。

- (3) 薄暗き室に籠りて研究に餘念なし。
 - (4) 湊は遠淺になりて船をとむるに便ならず。
 - (5) うらくゝとのどけき春の心より匂ひ出でたる山櫻花。
- 二、次の文の中から動詞ありと合成した詞を抜き出せ。

- (1) 東岸西岸の柳遅速同じからず。
- (2) 寒からず暑からず今は最好の時節なり。
- (3) 人の體温は三十七度内外なれば大方それより高かるべからず、低かるべからず。
- (4) 二日なほ大湊にとまれり。
- (5) 父父たらずとも子子たらざるべからず。
- (6) もし此事誠ならむには悲しむべき事なり。
- (7) 忽ちにして百千筋の金光きらゝとして八方に散じ、天地全く明なり。

- (8) すぐれたる技能を見て人々ただ呆然たり。
- (9) 鮮なる講義により初めて釋然たりき。
- (10) 堂々たるその風姿、流暢なるその辯舌、聽衆をして恍惚たらしむ。

第十二章 文の成分

【二三】 文といふものは人の考へや思ふこと即ち思想が言語によつてあらはされたものであつて、それを組立てるには體言に對して用言が説明をせねばならぬものであるといふこと及び助詞、副用語などはそれら文の骨子となつた體言、用言等を助けるにすぎないものであるといふことは既に述べたところである。

【二四】 主格 述格 助詞以外の詞が、文を組立てる成分として用ゐられる時に起る相互の關係の方式を格といふ。すべて用言はある事物を中心として、それについて何事かを説明するものであるが、その説明

せられる地位を主格といひ、それを説明する地位を述格といふ。

月出づ。

日は入りぬ。

風が涼しい。(口語)

上の文の「月」「日は」「風が」は主格であつて、「出づ」「入りぬ」「涼しい」は述格である。助詞は補助成分として格を示すはたらきをもつてゐるが、それ自身で一つの格に立つことはない。

【二五】 主格となる語

(一) 體言又は體言に助詞のついたもの。

月 清し。

鳥 なく。

風が吹く。(口語) 花は咲きぬ。

(二) 用言の連體形にこと、もの、ところなどの詞の連続したもの。

來ること遅し。

近からむものは目にも見よ
得るところが多い。(口語)

(三) 用言の連體形。

かなたに見ゆるは鎮守の森なり。

知るも知らぬも來り訪ふ。

(四) 詞をいくつも重ねたもの。

鰯、鮭、鱒、鱈、蟹は北海道に産す。

遠き山、近き川、かなたの森、こなたの村皆見えざなりぬ。

【二六】 述格となる語

(一) 用言

風すずし。

鈴蟲なく。

(二) 體言に助詞ぞ、かよの結びついた連語。

彼は何者ぞ。

今著いたものは終列車か。(口語)

これこそ日本一の剛の者よ。

(三) 形容詞「ごとし」、指定動詞の他の語と合したものの。

落花雪の如し。

日本軍は武勇なり。

父は縣會議員たり。

(四) 詞をいくつも重ねたもの。

月影清くさやけし。

雷電光りはためく。

この書はよきかあしきか。

【二七】 補格 用言が實際に用ゐられるにあたつて、それだけでは意義を十分にあらはすことが出来ない時に、その補充として用ゐられるも

のを補格といふ。

少女は花を持つてゐる。(口語)

彼は汽車に乗つた。(口語)

上の例を見ると、主格も述格も備つてゐるが、主格「少女は」は「彼は」に對して述格の「持つてゐる」乗つた」といふ用言だけでは、十分に思想をあらはすことが出来ない。この故に「花を」「汽車に」などの語を補つてその意義を十分にする。かやうに用ゐられるものを補格といふ。

【二八】 補格となる語

(一) 體言にを、に、へ、と、より、から、を、して、な、ど、を、つ、け、た、も、の、。

生徒が作文を書く。(口語)

その顔が猿に似てゐる。(口語)

彼は何處へ行くか。

秀吉は關白となりぬ。

父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

父はわれをして女醫たらしめんとす。

(二) 用言の連體形のもの。

老いたるは若きに扶けらる。

友の病むを知つた。(口語)

(三) 補格の多い場合。

われは父と花見に行きたり。

頼朝は範頼義経をして、義仲と宗盛とを討たしめき。

【二九】 以上述べた主格、述格、補格は文を組立てる上に主要な成分である。

【三〇】 連體格 體言の意義を委しく示すために、ある語をその上加へるのを連體格といふ。

彼は(大工の)徒弟となれり。

(涼しい)風が吹く。(口語)

上の例は「大工の」とか「涼しい」とかの語はなくても略、意義は通じるが、それらの語を補ふと意義が明かになる。この様なものが連體格である。

【三一】 連體格となる語

(一) 體言のが、のを伴つたもの。

予が朋友は大工の徒弟となれり。

いざ越せあの山、いざ踏めその露。

(二) 用言の連體形又はそれにのを加へたもの。

なすべき事はまことに多し。

新しき生活は始まれり。

私のあげた本は面白い本でせう。(口語)

百折撓まざるの決心を以て従事したり。

(三) 副詞の助詞のを伴つたもの。

わづかの勞力を惜んではならぬ。(口語)
これまた自然の道理なり。

【二三】修飾格 用言や語句の上にあつて、その意義を一層精密にするものを修飾格といふ。

雨がはかに降りだした。(口語)
波頗る高し。

上の例の「はかに」頗るは單語の性質から見ると副詞であるが、文の成分としての用法上修飾格といつて副詞と區別する。例へば木材としての檜、杉も、建築材料として使用せられる部分によつて床柱、天井板などといはれるやうなものである。

【二三】修飾格となる語

(一) 副詞又は副詞に助詞をそへたもの。
今年の展覧會は随分成績がよい。(口語)

諸子は既にこの意をさとりたらむ。

(二) 名詞に助詞に、との添うたもの。
誠に君の言の如し。

彈丸雨霰と散る。
その心水と淡くその德雪と潔し。

(三) 形容詞の連用形を用ゐたもの。(これは副詞ではなく形容詞の一用法である。)

水早く流る。
彈丸雨霰の如く散る。

(四) 助動詞で、助詞ばかり、まで、だけ、やらなどに連る用言及び體言。
彼は愧ぢて答へなかつた。(口語)

三年ばかり研究した。(口語)
御入用なだけ差上げます。(口語)

(五)として、に於て、を以てといふ詞を伴ふ連語。

一人として反對したものはなかつた。(口語)

この點に於て雙方の意見相反せり。

國民は無記名投票を以て衆議院議員を選舉す。

【二四】 以上述べた主格、述格、補格、連體格、修飾格の各々に立つ語をそれぞれ主語、述語、補語、連體語、修飾語といふ。

【二五】 呼格 以上述べた格の外に、文中の他の語とは形の上の關係なく、相手を呼びかけて指定するものを呼格といふ。

お婆さん、此處をちよつと借りたよ。(口語)

少納言よ、かうろほうの雪はいかならむ。

香をだにぬすめ、春の山風。

上の例の「お婆さん」「少納言よ」「春の山風」が呼格の例である。

練習 十二

一、次の文の主格と述格とを示せ。

(1) 微雨あり、風も亦起る。

(2) あなたは何をお學びになりましたか。(口語)

(3) こはまことに大事なり。

(4) 汽車は昨夜東京驛を發し今朝神戸についた。(口語)

(5) あの方と私の姉とは同じ年に生れ、同じ學校に學び、そして同じ年に他へとつぎました。(口語)

二、次の文について補格を指示せよ。

(1) 古の名將は士卒と艱苦を同じうせり。

(2) 子供は白い石と黒い石とを袋に入れた。(口語)

(3) 窓を明けて見ると銀世界になつてゐました。(口語)

(4) 正行頭を地につけてとかくの勅答に及ばず。

(5) 私は昨日の話を父にしておきました。(口語)

三次の文の修飾格、連體格、呼格を示せ。

- (1) 田面に水あふれ、林影倒に映れり。
- (2) 何處かて雲雀が啼いてゐる。(口語)
- (3) 粟の穂のこゝをたゞくなこの墓を。
- (4) 藤の花はひまつはれよ、枝は折るとも。
- (5) 天地開闢以來君臣の分定めり。
- (6) きりぎりすいたくななきそ。
- (7) 春の夜の朧月は夢よりも淡し。

四次の文を各成分に分解せよ。

- (1) 甲高い鋭い聲をきくことがある。(口語)
- (2) 枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮。
- (3) 嵐山の明るさが空にも水にも映つてゐる。(口語)
- (4) 舟は漸く山と山との峽に入つた。(口語)
- (5) 足にまかせて近郊をめぐる。

第十三章 文の構成

【二六】 文の成分にはその續け方に一定の順序がある。今その法則の
大要を述べよう。

(一) 主格 主格は通常文の首位にあるものである。

少年は人生の春なり。

鐘が遠くの方から聞えて来る。(口語)

上の例の「少年は」は「鐘が」は共に主格であつて、文の首位におかれてある。

(二) 述格 述格は通常文の末位にあるものである。

星まばらなり。

忘れた歌を思ひ出す。(口語)

上の例の「まばらなり」「思ひ出す」は即ち述格であつて、文の末尾におかれ

である。

(三)補格 補格は通常それを要する用言の上におかれるものである。農夫は稻を刈る。

彼は本を読んでゐる。(口語)

上の例の「稻を」は補格であつて、意義の十分でない用言の上におかれてある。補格が二以上ある時は相互の位置は一定してゐない。

あの方は花を友だちに贈りました。(口語)

あの方は友だちに花を贈りました。(口語)

(四)連體格 連體格は通常その意義を委しくせられてゐる體言の上にある。

富めるが故に人の心も溫和にて、かゝる仁慈の事も多かりき。

この寺には應擧のかいた繪がたくさんある。(口語)

上の例の「富めるが」は「人の」かゝる「仁慈の」この「かいた」は連體格であつ

て、その意義を委しくせられてゐる「故」「心」「仁慈」「事」「寺」「繪」の上にある。

(五)修飾格 修飾格は通常修飾せられてゐる用言の上にある。

蓮の花涼しげに咲き出づ。

我が心始めて平かなり。

上の例の「涼しげに」「始めて」などは「咲き」「平か」などの詞を修飾するものであるから、これらの詞の上に位してゐる。

【二七】 文を構成するにはその成分が前に述べたやうに位するのが普通であるが、時には主格、述格、補格等の位置が倒に置かれる場合がある。

舞へや舞へ、心やさしく。

見よ、うるはしく照る月を。

いざ行かむ、我は。

上の例はどれも述格が主格の前に置かれてゐる。これは多く歌謠又は美文に用ゐられるが、語勢をつよめ、その意味を鮮明にする力がある。

【二六】 文によつてはその文を簡潔にし、語勢をつよめるためにその中にあるべき成分をあらはさぬことがある。日常の會話や諺、俳句などに多い。普通に之を省略といふ。

(一) 主格をあらはさぬ場合。

手を觸るべからず。(人々を省略)

明日行きませう。(私はを省略)(口語)

随分降るね。(雨又は雪を省略)(口語)

(二) 述格又はその一部をあらはさぬ場合。

油斷大敵。(は、なりを省略)

千里の道も一步より。(初まるを省略)

(三) 補格をあらはさぬ場合。

昨日彼を訪ひ、今日亦訪へり。(彼をを省略)

今年も行つた。(花見に、彼處へなどを省略)(口語)

(四) 連體格、修飾格は必要に應じてつけるのであるから省略といふことはない。

練習 十三

次の文を普通の順序に改め、且つあらはれてゐない成分があればそれを補へ。

(1) 乞ふ、これを歴史に顧みよ。

(2) やよ正行、忘れたるか父の遺訓を。

(3) さらば行くか、やよ待て我が子。

(4) 人の短をいふことなかれ。

(5) 誰かいひし、月花ものをいはずと。

(6) 月見草雨にうなだれ悲しめる小松が岡に立ちて川見る。

(7) 一つもて君を祝はん、一つもて親を祝はん、二本ある松。

(8) 飛び上り宙にためらふ雀の子、はばたきてをり、そのゆるる枝を。

- (9) おのが身をいとほしみつゝ歸りくる夕細道に柿の花落つ。
- (10) 敷島の大和心を人とはば朝日ににほふ山櫻花。

第十四章 文の性質上の分類

【二元】 文はこれを性質の上から分類して感動體、命令體、疑問體、説明體の四種とする。

【三〇】 感動體の文 希望、感動をあらはす性質の文をいふ。

あはれ、しりたる人もがな。

世の中にさらぬ別れのなくもがな。

雲雀より上にやすらふ峠かな。

ああなつかしき古里よ。

いかにさかしき人の世や。

この種類の文は多くは下に助詞「かな」「よ」「や」などを伴ひ、主格、述格

の別がない。

【三一】 命令體の文 命令、禁止をあらはす性質の文をいふ。

行け、慎めや。

火鉢にあたるな。

汝等急いで行け。(口語)

各員一層奮勵努力せよ。

人々これを誤ることなかれ。

この種類の文の述語は命令形又は禁止の助詞「な」をもつてゐるのが普通である。命令體の文では往々主格をあらはさないことがある。

【三二】 疑問體の文 疑をあらはし又は問を起す性質の文をいふ。

汝は昨日それを見たりや。

あなたは長女ですか。(口語)

何ぞその言の悲痛なる。

この種類の文は助詞「ぞ」「や」「か」で終るか、用言の連體形で終るのが普通であつて、主格、述語を備へてゐる。

【二三】 説明體の文 事物の單なる説明をする性質の文をいふ。普通にも最も多く用ゐられる文はこの種の文である。

富士のながめは美しい。(口語)

眼の前に見えるやうな心持ちがする。(口語)

松の木の間に人影見ゆ。

この種の文には主格、述格の區別があり、その文を結ぶには用言が述格である時には終止形を用ゐる。但し文中に「ぞ」「なむ」といふ助詞を用ゐる場合は連體形で結び、「こそ」を用ゐた場合には已然形で結ぶ。このやうに係助詞に對して一定の終止をするのを係結といふことは既に述べた。

これぞ月光の曲の由來なる。

梅の花なむ咲きたる。

御身は不可能のことをこそぞませ給へ。

「ぞ」は口語では係助詞でなく、「こそ」は口語では終止形で結ぶ。

【二四】 文をその主格の如何によつて自稱の文、對稱の文、他稱の文の三種に分けて見ることが出来る。

(一) 自稱の文 (主格が第一人稱である。)

私は昨日かへりました。(口語)

われはあたまかきこよひの夢に入らむかな。

(二) 對稱の文 (主格が第二人稱である。)

あなたはここにおいでなさい。(口語)

汝もまた來れりや。

(三) 他稱の文 (主格が第三人稱である。)

父君も母君もいたくよろこびたまふ。

こはげに健全なる村を造るの二要素なるぞ。
この三種の區別は敬語の用ゐる方に深い關係がある。

練習 十四

二次の各の文についてその性質上より分類したる文體を示せ。

- (1) 母は我を愛したまへり。
- (2) 何故に靜に養生し給はざるか。
- (3) あはれことしの秋もいぬめり。
- (4) その廉潔の心げに欽すべきにあらずや。
- (5) 右の山隈に一むら赤く咲き出でたる八汐躑躅の美しさよ。
- (6) 朝敵をほろぼし大御心を安んじ奉れ。
- (7) 元の大軍至るに及んで文天祥大いに敗れ遂に敵兵に捕へらる。
- (8) ひとり燈火の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそ、こよなう慰むわざなれ。

二次の文について、その主格の差によつての文の區別を示せ。

- (1) 松竹よく榮ゆ。
- (2) 汝は平家の侍よな。
- (3) 私は父に手紙を送らなければならぬ。(口語)
- (4) 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
- (5) あゝ諸子は既にここの意をさとりたむ。

第十五章 文の構造上の分類

【二三】 文はその構造の上から單文と複文とに分ける。

【二六】 單文 感動體の如く、主格、述格の別の無いもの、又主格と述格との關係がただ一回だけ成立つてゐるものを單文といふ。

- (イ) あはれ美しき朝顔かな。
- (ロ) 雲井の櫻咲きにけり。

(ハ) 西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允は即ち維新の三傑なり。

(ニ) 彼はあまりの楽しさに歌ひ、舞ひ、踊り、狂へり。

上の例の(イ)(ロ)の單文であることはいふまでもない。(ハ)の例は名詞は三つあるが、一の述格の「三傑なり」に對しては一團となつて一の主格となつてゐる。(ニ)の例は述格に動詞が四つあるがこれも一團となつて一の主格に對して説明したものである。故に何れも單文である。

【二七】 複文 一文の中で主格と述格との結び付きが二回以上行はれてゐるものを複文といふ。

將軍●老●いて●元●氣●益●々●盛●なり●。
雲●は●龍●に●從●ひ●風●は●虎●に●從●ふ●。
人●民●安●堵●し●戸●々●蕃●殖●せ●り●。

上の例を見ると、主格と述格との結び付きが二回行はれてゐる。これらが複文である。

【二八】 複文はこれを重文と合文と有節文との三つに分けることが出来る。

【二九】 重文といふのは前後に對等の單文を二つ以上重ねて一つの文としたと見えるもので、次の例がそれである。

月●清●く●風●涼●し●。 花●も●咲●く●し●鳥●も●な●く●。(口語)
春●す●ぎ●て●夏●來●る●。 志●堅●く●且●つ●望●大●なり●。

【三〇】 合文といふのは、前後の單文が接續助詞で結合せられて一つの文となつた形のもので、次の例がそれである。

月●清●け●れ●ば●野●に●出●て●む●。
梅●は●咲●い●た●が●鶯●は●ま●だ●來●て●な●か●な●い●。(口語)

合文は前後二つの單文がし以外の接續の助詞で結合せられた文である。

【三一】 有節文とは、その文の中に語と同じ資格の文を含んでゐる文である。

いふ。その語と同じ資格に扱はれる文を節といふ。

あの方は禮儀の正しい方である。

君子は人の己を知らざるを憂へず。

私は思はぬ災難にあつたといつた。

あの人は交際がうまい。

上の例で傍線を施した語句は、主語、述語を備へた文であるが、獨立を失つてゐる。かやうな文を一部分としてもつてゐるのが有節文である。

練習 十五

次の文を構造上の種類によつて分類せよ。

- (1) 私はあたたかい夢路をたどつた。(口語)
- (2) 友も我もいたくつかれぬ。
- (3) 雨はふりいで、風加はり、雷鳴りはためく
- (4) 人は歩み、犬は走る。

- (5) よく勉強する人が最後に勝ちます。(口語)
- (6) 雪が降ると、野も山も銀世界となる。(口語)
- (7) 私はそれとはなしに考へて見たがわからぬ。(口語)
- (8) 雪は野山をうづめども、老いたる馬ぞ道は知る。
- (9) 風雅の嗜あるものはおのづから餘裕あり。
- (10) 外國人の瀬戸内海を過ぐるもの、その風光の明媚なるを見ては海上の一大公園なりと稱せり。

第十六章 敬語

【四三】敬語は交際上、他人に對して尊敬する意を表はす爲にする特別な語遣として用ゐる語である。この敬語の發達してゐることは國語の一特徴であつて、それは單語だけの現象ではなく文の組立にも關係をもつてゐるものである。單語としての敬語については既に述べた

から、ここでは主として文の組立の上から説く事にする。

【一四三】 自分の事について謙つた語遣をする爲めに用ゐる敬語を謙稱といひ、相手や他の人の事に對して敬つた語遣をする爲めに用ゐる敬語を敬稱といふことは既に説いたところである。

【一四四】 すべて體言が敬語としてあらはれるには主格、補格などとして用ゐられるのであるが、それらは既に述べたから今はあげない。

【一四五】 連體格、修飾格の敬語

さりとして御いたはしの事よ。

上の例は敬語が連體格となつたものである。

御姉妹の御仲拜し奉るさへ御羨しきまでに御陸じ。

上の例は敬語が修飾格となつたものである。

【一四六】 述格の敬語

叡感淺からず御製を下し給ふ。

各員の世間話を御聽取遊ばれぬ。

若君に供奉し奉る。

上の例は敬語が説明體の文の述格となつたものである。

幼き宮たちも驚きやし給ふらん。

何故入り給はざるか。

上の例は敬語が疑問體の文の述格となつたものである。

願はくは二週間の猶豫を賜へ。

何にても苦しからず、ある物を參らせよ。

上の例は敬語が命令體の文の述格となつたものである。

【一四七】 敬語を用ゐる場合には自稱の文、對稱の文、他稱の文の差別に隨つてそれ／＼の法則がある。

【一四八】 自稱の文の敬語には述格に謙稱を用ゐる。その文中の自稱及び之に關するものには謙稱の名詞又は用言を用ゐ、對稱、他稱に關する

ものには敬稱を用ゐる。

せめては此の所在を君に知らせ奉らばや。

寶物殿に到りて御遺物を拜觀す。

右の二つの例は何れも自稱の文であるから、その述格にはそれ／＼謙稱の「奉る」「拜觀す」を用ゐ、その文中の他稱の「君」「御遺物」は敬稱が用ゐてゐる。

【一〇】 對稱の文の敬語には述格に敬稱の用言又は敬意の助動詞、若くはそれらの動詞に更に謙稱の助詞を加へることがある。文中の主格、呼格を對稱の敬稱であらはすことがある。又その文中の自稱、他稱の敬語は自稱の文と同じである。

御身は誰人なればかく心なき事をいひ給ふぞ。

この例は主格が敬稱で、述格も敬稱のものである。

父上、御身は何時歸り來り給ひしぞ。

これは呼格が敬稱である場合の例である。

【一〇】 他稱の文の敬語には二通の状態がある。一はその主格を尊敬していふ時にあらはれるものであつて、その述格及び文中にあらはれる自稱、對稱、他稱の敬語については對稱の文の敬語と同様である。

其の人々の遺族に對しては別に若干の御目錄をさへ遣はしたま

ひぬ。

この例は主格はあらはれてゐないが、尊敬すべき方であるから、述格には敬稱を用ゐ、その文中にある主格に關するものにも「御目錄」と敬稱を用ゐてある。今一つは稱格に特に尊敬の意を加へることのない場合であつて、其の述格を自稱の文のやうに謙稱の動詞を用ゐる。

道灌歌を以て答へ奉る。

この文は主格たる道灌に敬語を用ゐないで、述格に「奉る」といふ謙稱が用ゐてある。これは主格がそれ以上の身分の人に對するからである。

【三五】 複文の中の敬語

(一) 重文の上の文の述格の敬語であるものはその用言の連用形で重ねる。

神宮の事を奏する間陛下には立御あらせられ、各大臣以下陛下の御例に倣ひ奉る。

(二) 合文の上の文の述格の敬語であるものはその用言に接續助詞を添へてあらはす。

わが君今出て立ち給はば、御目にかゝることこれや限なるべき。

(三) 有節文の敬語

祈年祭とは年穀の豊熟を祈らせらるる御儀なり。

【三五】 すべて敬語は既に述べた通り、他を敬ひ自分を謙る精神をあらはすと共に、自己の品位をも保つものであつて交際上甚だ必要な事柄であるから、くれぐれも之が使用を誤らぬやうに注意しなければならぬ。

ぬ。

練習 十六

一、次の文の中にある敬語を抜き出して、敬稱か謙稱かを考へよ。

(1) この句につきてひそかに物語したまひけり。

(2) わらはこそ参りて候へ。

(3) 何事も仰せられず。たゞ左様かといと軽く宣ひき。

(4) この事貴姉は如何思召され候ふか。

(5) 島民はひたすら大御心の安らかにましまさむことを祈り奉りぬ。

二、次の文を自稱の文、對稱の文、他稱の文に區別して、その敬語の用ゐ方を考へよ。

(1) 法皇忠盛に仰せ射しめらる。

(2) あれは私のでございます。(口語)

(3) わらはこそ参りて候へ。

- (4) 静かにせられよ。
- (5) 御身は何人にてましますぞや。
- (6) 是非拜見したう存じます。(口語)

練習 十七

- 一、動詞活用の見分け方を述べよ。
- 二、動詞の活用形の用法を、活用の各の種類について述べよ。
- 三、動詞と形容詞との口語と文語とを比較して述べよ。
- 四、口語の助動詞と文語の助動詞とを比較研究せよ。
- 五、助詞の種類をいへ。
- 六、文の成分について説明せよ。
- 七、文を性質上より分類して説明せよ。
- 八、文を構造上より分類して説明せよ。
- 九、形容詞、動詞、助動詞、助詞等の或るものに「あり」が結合すると、如何にその詞を變化するかについて述べよ。

- 一〇、敬語に關係ある接辭と助動詞とをあげよ。
- 一一、形容詞、動詞についての敬語を述べよ。
- 一二、文中に於ける敬語の用法を述べよ。
- 一三、文の成分の省略せられる場合を述べよ。

昭和十二年十月三日
昭和十三年三月十三日
昭和十三年三月十八日

印刷發行
訂正再版印刷
訂正再版發行

定價金五拾五錢

著者 山田孝雄

發行者 株式會社寶文館

代表者 大葉久治

印刷者 赤羽正巳



發行所 關西專賣

東京市日本橋區室町四丁目
振替口座東京二八〇番
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番

株式會社寶文館
株式會社大阪寶文館

津田校二年

藤井妙子



文庫
38
622

広島大学図書
2000026622
